

研究の評価

評価委員 馬場 一雄

今年度の研究によって、先天代謝異常、甲状腺機能低下、若年型糖尿病並びに先天性凝固障害の、わが国における疫学の実態が明らかにされたことは、大きな収穫とあつと思う。

また、酵素免疫法による先天代謝異常の新しいスクリーニング法の開発や、カルシウム代謝異常の診断基準、凝固障害症の治療指針の設定に向けての努力が傾けられる一方、先天代謝異常の治療指針の見直しや、甲状腺機能低下の早期治療の効用が検討されたことにも大きな意義が認められる。

これらの研究に伴って、幾つかの新しい事実が発見されたこと、たとえばニーマン・ピック病のモデル動物の発見、糖原病の新しい病型の認定等も、この研究の本来の目的からすれば、いわば副産物と見なすべきものではあるが、医学の進歩への貢献は、やはり高く評価すべきであろう。

全体を通じて、各分担研究者が厚生行政や社会の福祉に直結し得る具体的成果を求めて研究を推進していることが明瞭に察知され、この点を特に高く評価したい。

本研究が完了する時点までに、実用的なスクリーニングの術式、明快な診断、治療基準、実際的な生活指針などが確立されることを期待して評価のことばとしたい。